

明治学院大学

HOPE COLLEGE

交流20周年記念誌



MELJI GAKUIN UNIVERSITY

明治学院大学

と合ひ の



C O N T E N T S

交流20周年によせて(学長 森井 眞)……………	2
交流の歴史……………	4
交流20周年記念プログラム……………	12
ホープ・カレッジ学長 メッセージ……………	14
シンポジウムに憶う(G. J. Van Wyk)……………	16
国際シンポジウム……………	22
今後の国際交流の展望(副学長 福田垂穂)…	47
付録 留学生名簿……………	48

互いに学び合う 地球的規模の 世界観を

《交流》の意義

森井 眞

まことに言いにくい、申訳ない話だけれど、正直に白状すると、私はアメリカの大学との交流ということにはあまり関心がなかった。理由はいくつもあるが、例えばいまアメリカ合衆国はほとんど日本の宗主国であり、この国ではすべてがアメリカを中心に動いており、特に若い人たちは猫も杓子もアメリカなのだから、なにも我々までわざわざ「アメリカ」ということもあるまい、という気がするからである。また例えば、「大」日本帝国の迷夢を打ち砕かれたばかりの我々日本人にとって、「偉大なるアメリカ」を称える時代遅れの独善家レーガンがあれほど圧倒的な支持をえているかのようにみえるアメリカは、ほとほとあきれ果ているからでもある。そんなことで、交流20周年を記念してホープを訪問する羽目に陥ったとき、私ははなはだ気が重かったのだけれど、これも浮き世の付合い

と観念して成田を飛び立ったわけである。

ところがホープを実際に訪れてみて私はさまざまなことを体験した。大学はホランド・ミシガンの町と一体であり、両大学間の20年に達した交流の歴史の背後には、ホランド・ミシガンの人達と日本との間のはるかに永いお付き合いがあったこと、そして数多くの人がいまも日本に好意と関心を抱き続けている、という事実を知って、驚きまたうれしく思った。日本への関心、明治学院大学への関心は、大学の教師たちのあいだでも、私の想像をはるかにこえて強いものだった。国際学部の計画について話すようとヴァンワイレン学長に招かれたとき、学長宅の昼食会には日本文学、西洋古典、英文学、演劇学、社会学、経済学、数学その他を専攻する10人をこえる教師たちが集まって熱心に私の話をきき質疑を交して、それぞれに日本訪問、明学訪問の希望を述べられた。ホープ・カレッジは世界各地の大学との間に20ほどの交流関係



学長 森井 眞

を結んでいるが、そのなかでも本学との交流に特別の意義を認めていることを私は知った。

交流計画の生みの親であるポール・フリード先生はまことに心の暖い、視野の広い方である。もちろん明治学院にヴァンワイク先生がおられたということも、両大学間に交流が始められる重要な契機だったには違いないが、それにしてもこの計画がフリード先生の真に地球的な視野のなかで構想されたという事実は重要なことである。そして短いホープ滞在中に、私はいかに多くの優れた個性に遇ったことか。いかに多くの人が本学にまた日本に熱い眼差を注いでいることか。ホープの暖いもてなしのなかで私は強い感動を覚えた。

レーガン大統領との間では話は通じないかもしれない。しかしレーガンの危険な力の政策、核戦略、大国主義を、アメリカの民衆すべてが支持しているわけでは決してない。国民のあいだでは同じ人

間同士として国境をこえて話が通じあうであろうし、またそうでなければならないのである。本学はこれから世界のさまざまな国の大学と交流契約を結ぶことになるであろう。交流関係がどこの国との間に作られようと、それが西欧の国であろうと第三世界の国であろうと、交流とは決して単に学びとることでも単に与えることでもあってはならない。互いに学びまた与え合うことによってお互いが新しくなり、それを通して新しい世界を建設していく、ということではなければならないであろう。ホープ・カレッジと本学との関係は、大統領がどうであれ今後も国際交流の基点となるはずであるが、これからは本学は自らの持つ最良のものを相手に贈り、相手の期待に応え相手に喜ばれるようであるべきだと思う。20年の交流の歴史が作られるために貢献してこられた多くの方々の御努力に深く感謝するとともに、今後の発展を心から祈らずにはいられない。

学びあい与えあった20年の



若林 学長

1964年若林学長就任の直後に、大学首脳会議の中で、本学と米国ミッションボードとの協力体制の強化、本学のキリスト教教育の充実、本学の特色を新しい時代にいかに出していくか、等について話し合われた際に、本学学生を米国大学での勉強と、ホームステイによる家庭生活体験を通して、国際人としての資質をそなえた学生の育成を図ろうという計画が打ち出された。

これを受けて若林学長は、同年スイスで開催された国際社会事業学校連盟の総会に出席後渡米し、帰米中の G. J. Van Wyk 教授とともにニューヨークのミッションボードを訪問、この計画について協議した。そして RCA(米国改革派教会)関係学校の Northwestern College、Central College、Hope College を訪問、本学の計画を提案し、各大学ともこれに大きな関心を示したが、この中ですでにニューヨークの CST(Council on Student Travel)の協力をえて Vienna Sum-

mer School 等の国際交流計画に実績のあった Hope College と、翌年1965年夏より本学学生受入れの協力をとりつけて帰国した。

若林学長の帰国後、本学では太平洋往復チャーター便について CST 在日代表者およびこれを援助する日米協会とともに運輸省とくりかえし協議し、当時国際航空協定により飛ぶことのできなかったこの種のチャーター便の特別運航許可を与えることができた。しかし、本学のみでの単独プログラムでは許可されず、結局初年度は Hope College の他 2 大学が夏季学期を開講、日本人学生を受入れることになった。そのためこの計画は日米協会を通して全国的な大学生の参加公募となり、本学はそのうち Hope College についてその選考を委された。当時はまだ一般人の海外渡航は困難であったので、全国的な反響をよび、また参加学生達には “Student ambassador” として渡米するようにと日米協会主催の昼食会で激励

交流史

されたほどであった。

若林学長から森井学長までの20年間、この交流プログラムは、両校の努力により年々充実し、本学院創立100周年を機に「日米経済社会問題共同セミナー」として相互に学生を派遣する短期交換プログラムに発展した。これまで明治学院大学が派遣した留学生は393名、引率教職員35名、Hope College より受入れた留学生40名、引率教員4名をかぞえ、全国的に見ても特色のあるすぐれた短期交換プログラムとなっている。

交流20周年のあゆみ

実施年月日	引率者	学生
第1回1965年7月5日～9月1日	●赤川 裕(文学部)	23名
第2回1966年7月6日～9月1日	●G. J. Van Wyk(文学部)	25名
	●宿崎 和夫(事務局)	
第3回1967年7月3日～9月2日	●新倉 俊一(文学部)	21名
	●前田 薫(図書館)	
第4回1968年7月6日～9月2日	●大井上 滋(文学部)	25名
	●成瀬 武史(文学部)	
第5回1969年7月3日～8月29日	●島山 龍郎(社会学部)	15名
第6回1970年7月3日～8月31日	●齐藤 宏(文学部)	20名
第7回1971年7月6日～8月28日	●林 豊(文学部)	23名
第8回1972年7月1日～8月24日	●渋谷 浩(文学部)	23名
	●岡田 貞二(教務部)	
第9回1973年7月3日～8月26日	●佐藤 和男(経済学部)	22名
	●三浦 正雄(学生部)	
第10回1974年7月1日～8月27日	●田村 剛(経済学部)	23名
	●中野 堯正(経理部)	
第11回1975年6月30日～8月26日	●関 裕三郎(文学部)	20名
	●長嶋 昌平(企画室)	
第12回1976年6月29日～8月26日	●肥田日出生(経済学部)	26名
	●見上 哲也(総務部)	
第13回1977年6月28日～8月25日	●平出 宣道(経済学部)	22名
	●近堂 文彦(教務部)	
第14回1978年7月20日～9月23日	●G. J. Van Wyk(文学部)	14名
	●鈴木 忠男(広報室)	
第15回1979年8月25日～10月2日	●秋山 智久(社会学部)	15名
	●伊藤 一弘(総務部)	
{ 第1回1980年5月17日～6月21日	●J. C. Piers	9名
第16回1980年8月23日～10月1日	●酒田 正敏(法学部)	16名
	●棚田 正雄(学生部)	
{ 第2回1981年5月19日～6月22日	●J. C. Piers	11名
第17回1981年8月23日～10月1日	●広瀬 善男(法学部)	15名
	●佐々木 孟(情報処理)	
第18回1982年8月23日～10月1日	●福田 垂穂(社会学部)	15名
	●矢野 信昭(教務部)	
{ 第3回1983年5月14日～6月17日	●D. A. Luidens	11名
第19回1983年8月23日～10月1日	●B. M. Wilkerson(文学部)	15名
	●佐野 邦彦(学生部)	
{ 第4回1984年5月12日～6月16日	●N. Sobania	8名
	●A. Muiderman	
第20回1984年8月18日～9月30日	●外池 滋生(文学部)	15名
	●村岡美枝子(経理部)	



20周年を記念してホープを訪問した森井学長、Hollenbach先生ご夫妻と同行の外池助教授





1965年 (第1回) 引率 赤川先生



1966年 羽田から Van Wyk 先生
宿崎氏





1968年 記念植樹



1977年

1978年





1983年 日米共同セミナー 来日したホープ学生



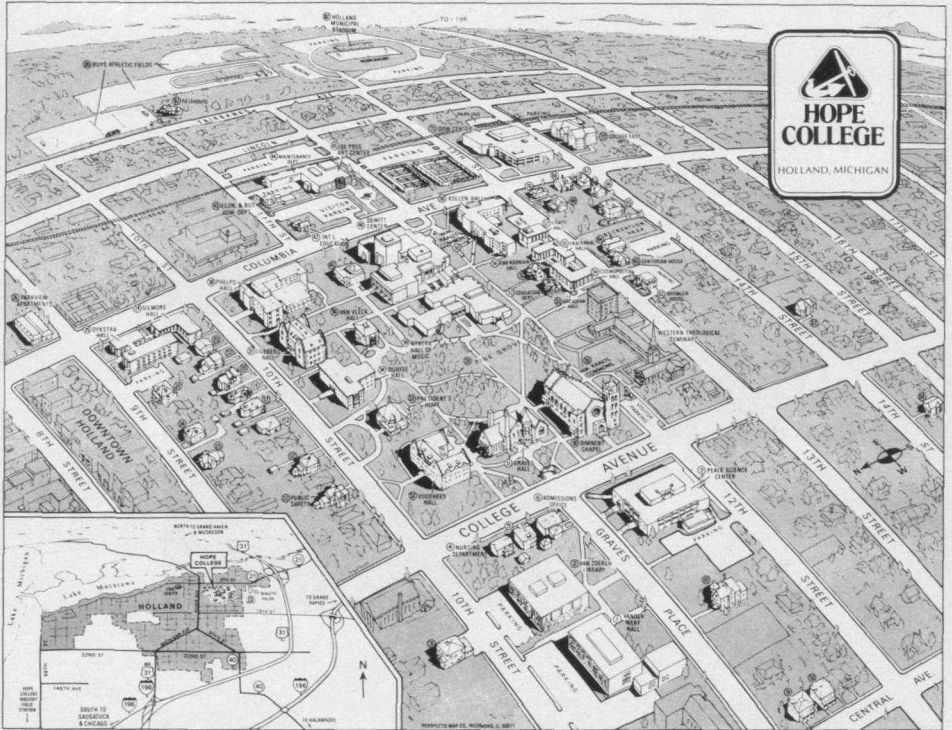
1983年 授業の準備

1984年 日米共同セミナー ホームステイ





1984年（第20回）始業式へ



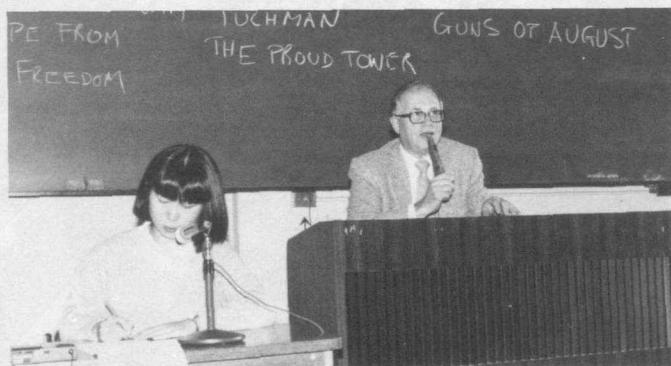
交流20周年記念 プログラム

1. 森井 眞学長 ホープ・カレッジ訪問

- 1984年8月27日 ホープ・カレッジ入学式参列

2. Dr. P. G. FRIED (前ホープ・カレッジ国際センター所長) 明治学院大学訪問

- 1984年11月7日 公開講義
「ヨーロッパ史に見る戦争と平和」
通訳：坂上祐美子 (英文学科卒)



3. 国際シンポジウム開催

- 1984年11月9日 公開シンポジウム
「地球世界に生きる国際人の育成」

公開シンポジウム

「地球世界に生きる国際人の育成」 “Global Education for Global Citizens”

挨拶：Dr. Gordon J. Van Wylen(ホープ大学学長)
シンポジウムに憶う：Gordon J. Van Wyk(明治学院大学教授)

「シンポジウム」

日時：1984年11月9日(金) 14時～16時

場所：明治学院記念館

シンポジアスト： Dr. Paul G. FRIED (前ホープ大学歴史学教授)

(順不同) 木田 宏先生(国立教育研究所長)

縫田 曄子先生(ジャーナリスト)

豊田 利幸先生(明治学院大学教授)

司会：福田 垂穂(国際交流担当 副学長)

通訳：Agneta Riber(文学部専任講師)

開会挨拶：学長 森井 眞

“What is past is prologue”

I am honored by your invitation to contribute a brief introductory message for the booklet devoted to the theme, “Global Education for Global Citizens” which Meiji Gakuin University is publishing this year. The twentieth anniversary of the Hope College-Meiji Gakuin Program, which you observed in November 1984, called attention to the great contribution which this exchange of students between Japan and the United States has made to the lives of students on both sides of the Pacific. We count it a privilege and honor to have this association with one of the distinguished universities in Japan.

The theme of your symposium, “Global Education for Global Citizens,” places the record of what we have accomplished thus far into proper perspective, and helps us recognize that what we have achieved in the past must serve as a challenge to us for the future. What is past, while significant in itself, is also a prologue for what is to follow.

Global Education for Global Citizens addresses the important questions: How can we foster greater participation in international exchanges? How can we move from a bilateral program developed by one Japanese university and one undergraduate college in the United

States to programs which will provide meaningful opportunities for intercultural experiences to a larger segment of our citizens, both young and more mature, on a global basis?

The exchange which our two institutions began twenty years ago has some similarity to the early voyages of Columbus or man's first attempts to reach the moon. Together we have made a beginning. We may even look with gratitude and pride at what we have achieved. But, your symposium presents us and all who read this report with the great task which lies before us. We are indebted to you for this challenge which, with confidence and faith, we are eager to face together with you.

Gordon J. Van Wylene

この度、明治学院大学が刊行される小冊子「地球世界に生きる国際人の育成」に、短かいメッセージを寄せるようお誘いいただきましたことは、私の名誉でございます。

昨1984年11月に行われましたホープカレッジ明治学院大学プログラムの20周年記念行事は、日米間のこの学生交流が、太平洋をはさむ両国学生の人生に与えた貢献の大きさを、改めて想起させるものでありました。私どもは、日本有数の大学のひとつと、こうした交わりの中にありますことを、得難い名誉であると存じております。

シンポジウムの主題「地球世界に生きる国際人の育成」は、言わば、私どもが今まで為し遂げてきた歴史に、新しい展望を開こうとするものであり、過去の業績が、未来への挑戦の一助となることを理解させてくれるものでもあります。過去に起ったことは、それ自体意義深いものでありますが、同時にそれは来るべき未来への序詩でもあるのです。

「地球世界に生きる国際人の育成」という主題は、いくつかの重要な問いを投げかけています。どうすれば国際交流に、より多くの人の参加を促すことができるのでしょうか？どうすれば、ひとつの日本の大学とひとつのアメリカの大学間にはじまった相互交流を、青年も成人も巻きこんだ、もっと広範な市民各層に対する有意義な文化交流の機会にまで発展さ

せることができるのでしょうか？……

20年前に、私ども2大学が始めたこの交流事業は、昔のコロンブスの航海や、月に到達しようとした人類の最初の試みにも通ずるものがあります。私どもは、相携えて第一歩を踏みだしたのです。これまでの実績に、私どもは感激と誇りを覚えます。同時にこのシンポジウムは、私どもに、またこの報告書の読者すべてに、眼前に横たわる大いなる課題を示してくれております。それに目を向けさせてくださったことに感謝しながら、私どもも、固い決意と確信をもって、あなた方と共に、この課題に取り組んでゆきたいと願うものです。

ゴードン・J・ヴァンワイレン

“Hope College and Meiji Gakuin Univer-

The title selected for this Symposium sounds good. It gains instant approval on all sides. No one these days can be found supporting isolation or exclusivism. Global community, international cooperation, the family of nations – no one would dare to buck such idealism.

And so every city must have its sister city abroad, and every school must have an international exchange program of some sort. The traditional ensoku (school trip) is now stretched far beyond Kyoto for an educational experience overseas. Even tender kindergartners, with a fresh handkerchief pinned to their blouses, are flown off to Hawaii for a week, and those a bit older seem to find a Bible camp in Yosemite more enlightening than one in Hakone. A “junior year abroad” may work havoc with one’s normal progression through high school or college, but it is likely to pay off in some future omiai. And there is no one who endorses international education more enthusiastically than the friendly neighborhood travel agent, whose colorful literature makes a summer spent in an “academic seminar” overseas sound far more worthwhile than the drab routine offered on the home campus.

But does global experience really make for better citizens? Parents may

sometimes wonder when they meet their returning offspring at the airport, wearing outlandish clothes and heavy-laden with omiyage purchased at the Tax-Free Store. There is no question but that the returning scholar has picked up a lot of new ideas while he was away, but all too often they are of the kind that shock grandmother and the neighbors.

Perhaps this appraisal is unnecessarily cynical and exaggerated, but I trust that I have made my point. International education is of real and lasting value only when it is governed by the same kind of critical thinking and radical evaluation that underlies the whole educational process. It was to encourage and promote such an evaluation and reassessment that this Symposium was organized.

Dr. Paul Fried, whose presence at Meiji Gakuin University provided the occasion for the Symposium, is not only a pioneer in the field of international education but is himself a product of such training. Born in Europe he came to the United States in his late teens. His family experiences at the hands of Hitler, his American education at Hope College and Harvard University, and his participation in the war crime trials all played their part in shaping the interna-

sity and International Education”

tional dimensions of his educational philosophy. In the late 1950's, back again at Hope College, now as Professor of European History and Director of International Education, he inaugurated the Vienna Summer School Program, which in its long history and highly creative approach has done much to influence and shape the course of other American college overseas programs.

We at Meiji Gakuin University have been richly blessed in having Dr. Fried as our partner at Hope College in the development of our program during these past twenty years. Each year he came up with a fresh and innovative twist, many of which were subsequently picked up by other schools and now have become standard operating procedure. To mention but one, he initiated the Oral Research Project, in which our Japanese students are sent off into the city to conduct interviews and thus to gather first-hand information for use in their chosen area of investigation, which at the end of the month is incorporated in a research paper which is presented orally before the class.

From the very inauguration of our program with Hope College our emphasis has been on American Studies, in which we have stressed the unique fea-

tures of American institutions – political, economic, religious, educational, and social – and not on the English language as such. But through the challenges presented by such activities as those involved in the Oral Research Project, students, through what we like to call the “oblique approach”, no doubt have made far greater progress in their use of English than they ever would have in the usual conversation classes.

Eight years ago, on the occasion of Meiji Gakuin's Centenary celebration, the program between the two schools became truly reciprocal, when the two presidents agreed on a program that would bring up to fifteen Hope students to Tokyo in May, near the beginning of our school year, and send a like number of our students to Hope in September, just in time for Convocation on the opening of the football season. On each campus in turn the students are involved in a Joint Seminar on Economic and Social Issues, where the comparative study aims to bring new dimensions of understanding on both sides.

Dr. Fried's presence on our campus has made us aware of the wide range of educational opportunities abroad that are available to Hope students – in Europe, Africa, Latin America, and

Asia. Though up to now Meiji Gakuin has concentrated rather exclusively on its program in the United States, it has not been blind to the challenge of cooperating with sister schools in Asia. Membership in the Association of Christian Universities and Colleges in Asia (ACUCA) opens the doors to cooperative arrangements with like-minded schools stretching from Korea down through Taiwan and the Philippines to Hongkong, Indonesia, Thailand, and as far as Pakistan. At the same time the University is equipping itself to meet the challenge by organizing a new Faculty of International Studies, where a part of the curriculum will focus on a cooperative approach to Christian social work in the "Third World".

Even when this new program is fully implemented our educational program will be somewhat short of "global", we realize. But of course this is true of all of education. No school or scholar can even pretend to cover all areas of knowledge. Isn't the aim of education rather to develop a disciplined attitude of mind and a critical faculty that will enable a person to cope creatively with whatever challenges he may encounter in life? This also, it seems to me, should characterize our philosophy of international

education. In bringing our students into a living encounter with other cultures – whether one or many – we are encouraging, even prodding, them to think globally rather than provincially, internationally rather than nationally, and thus to realize the larger dimensions of a truly liberal and liberating education.

Schools like Hope College and Meiji Gakuin have a unique responsibility in such an approach to education. Both were founded as "mission schools", i. e., schools with a peculiarly Christian mission. They only fulfill this purpose when they send forth students who have a high conception of what God wants them to do with their lives in the world and who have a very broad appreciation of what that world needs. We pray that our program may help them find the place where God wants them to serve that world, wherever it may be.

Gordon J. Van Wyk

Professor of American History

Retiring Director of the Program for International Cooperation in Education (PICE)

Meiji Gakuin University

明治学院大学文学部教授
国際交流計画委員会顧問
ゴードン・J・ヴァンワイク

本シンポジウムに、大変良いタイトルを選んだものだと思う。このタイトルには誰もが賛同することだろう。最近では孤立主義や排他主義を支持する者も、地球共同体、国際協力、国家家族論等の理想主義に反発する者もいなくなってしまった。

そのような状況だから、都市全てが海外に姉妹都市をつくるように、学校全てもまた国際交流計画を持つのが当然と思われる。たとえば、普通の遠足でさえ、京都を通りすぎて、海外での教育体験に代わった。真新しいハンカチを胸にとめた幼い幼稚園児さえも1週間のハワイ遠足(旅行)に出かけ、また少し年長になれば、米国西部のヨセミテ公園へ聖書研究合宿に出かける。彼らは、それが海外で行われるというだけで従来行われていた箱根での聖書研究合宿よりずっと強く啓発されると思こんでいる。『ジュニアイヤーアブロードプログラム(高校・大学在学中に休学して体験留学をする制度)』は、一般的に高校や大学の進級には妨げになることもあるが、それでも留学した本人としては、それで箔がついて将来お見合いでもすれば見返りもあるぐらいに考えている。サービスの良い出

入りの旅行業者が誰よりも1番熱心に国際教育にとりくみ、彼らのつくったカラフルな案内パンフレットは、それを手にとる人々に“アカデミックセミナー”に参加するひと夏こそ、さえない日々をくり返してしかない大学生活より数倍も価値があると思こませている。

だが国際体験は本当に良い市民を育成しているのだろうか。はでな服装をし、免税店で買いこんだたくさんのみやげのつまった重い荷物を抱えた我子の帰国した姿を見て、親たちは首をかしげているかもしれない。帰国したばかりの学生たちが、家族にショックを与えるように、帰国した教授たちもまた渡航中にしいれた新しい考え方で同僚たちにショックを与えるものだ。

このような言い方は、少々極端な皮肉で誇張されていると思われるかもしれないが、とにかく私の言わんとすることは的をえていると思う。本当の国際教育とは、教育全体の根本に鋭い考察と人々の承認をうけた評価が存在する時初めて確かな価値をもってくるものだ。そしてそもそも本シンポジウムの目的は、そうした評価や再評価を奨励し推進することにある。

本シンポジウム出席のため明治学院におこしいただいたポール・フリード博士は国際教育のパイオニアであるばかりでなく、いわば彼自身も国際的教育的の申し子といえる。じつはフリード博士は欧州

生まれで10代の終りに渡米してきたという経歴をもっている。彼の家族は欧州でヒットラーの手にかかり悲惨な最期をとげた。彼はアメリカに移住後ホープカレッジとハーバード大学で教育を受け、戦後はニュルンベルグ裁判にも関わった。このような様々な国際的体験が今日の彼独特の教育哲学を培ってきたのだ。彼は1950年代末に、母校であるホープカレッジに、欧州史の教授としてまた同時に国際教育のディレクターとして迎えられた。ホープカレッジでフリード博士が始めたウィーン夏期講座は、今でも続いている歴史的なプログラムだが、ことにその創造的で新しい教育方法は全米の大学が現在もっている様々な海外研修プログラムに強い影響を与えている。

私共明治学院大学も、フリード博士には、20周年を迎えた夏期プログラムで、ホープカレッジの良きパートナーとして大変お世話になった。彼が夏期講座を始めてからというもの、毎年新たな困難に遭遇しつつあったが、そのたびに彼が創り出した方法は、時を経ずして他の学校の手本となり、今では基礎的な方法として定着している。その中に、オーラルリサーチプロジェクトがある。これは彼が提案した学習方法で、明治学院の学生も渡米した折に実施しているが、(日本人の)学生は自分で選んだ課題を、米国の一般の人々の中へ直接はいつてゆき面接調査などで情報を得ながら、深く考え研究し

ていくのだ。また調査後には、その結果をレポートに書き発表する機会も与えられている。

ホープカレッジプログラムを始めた当初から、私達は英語学習よりも、アメリカの政治・経済・宗教・教育・社会の各分野を総合的に学ぶアメリカ研究に重点をおいてきた。だがオーラルリサーチプロジェクトなど、英語学習にはまわり道とも思える方法で、むしろありきたりの英会話講座などでは達成できない大きな進歩が、英語の面でも見られたのだ。

8年前、本学創立100周年を機に、本プログラムは本当の相互交流になった。両校の学長は同意書を取りかわし、アメリカ人学生は5月に約15名を本学が受け入れ、また日本人学生も同様に約15名が毎年米国の新学期にあわせて9月に派遣することが決定された。学生たちはそれぞれの訪問先で、両国の立場を理解する新しい方向を発見するため、日米経済社会問題共同セミナーに参加し比較研究を行っている。

フリード博士の来日を機に私達は、ホープカレッジの学生たちにはヨーロッパをはじめとしてアフリカ・南アメリカ・アジアなど広い範囲に及ぶ海外教育の機会が用意されていることを知った。それに比較して、明治学院大学では、国際交流といえばアメリカに集中し、今だから積極的にアジアの大学との交流にとりくむ姿勢がみられなかった。元来明治学

院は、アジアキリスト教主義大学連盟の加盟校として、遠くはパキスタン・インドネシア・香港・フィリピン・近くは台湾・韓国などの大学と交流する機会が与えられていることを忘れてはならない。現在進められている国際学部新設計画の中でも、そのカリキュラムの中で「第三世界」のキリスト教福祉に焦点をあてている。

しかし仮に私達のこの新しい試みが100パーセント実現されたとしてもまだ「地球的」と呼ぶにはまだ早すぎるように思う。もちろんこれは、教育全般に同様のことで、どの大学もどこの教授も自分だけで全学問分野を網羅するのはどうして無理なことだ。

そもそも教育の目的とは、人が一生のうちに遭遇するあらゆる困難に、柔軟性のある対処を示せる能力と態度を育てることにあるのではないだろうか。教育の目的を考えるのと同様に、国際教育の目的も確立する必要があるのではないだろうか。それは言うなれば、学生たちに自国の文化とは異った文化の中で生活する機会を与えることで、彼らに地域的にではなく地球的に、自国中心的ではなく国際的に考える態度を身につけさせることにある。そしてそういう学生たちの成長が達成されてこそ、真の教養と自由教育が実現できるのだ。

ホープカレッジと明治学院大学は、教育機関として共通の特殊な責任を負って

いる大学である。両校はミッションスクールとして設立された歴史により、キリスト教のある特殊な使命のもとに建てられたのだ。その使命とは、私達の大学において、神が私達に行なわせようとしていることは何かを知り、社会が必要としていることを広い観点から見きわめることのできる若者を教育し社会へと送り出していくことである。私たちは、両校の交流プログラムが、それがどんな地のもてでも、神が望まれる場所を、学生たちが探しあてる一助になるよう祈っている。

—END—

国際シンポジウム

(文中敬称略)

森井：

一言御挨拶申し上げます。学長の森井でございます。今日はみなさんよくおいで下さいました。秋の好天に恵まれて今日のシンポジウムを開くことができますのは私どもの大きな喜びでございます。まず何よりも、このシンポジウムへの御発言をお願いしましたところ、快くお聞き入れ下さいまして、それぞれの貴重な時間を割いて御参加下さいました先生方に心から御礼申し上げます。それからこのシンポジウムに関心を寄せて下さいまして学内外からお集まり下さいましたみなさま方、心から歓迎し、御参加に感謝いたします。

明治学院はヘボン、ブラウン、フルベッキの3人を中心に今から107年前の1877年に始まりました。それ以来、キリスト教を基にする人間形成ということを目指して、国外から常に何人かの教師を招き、また、戦争までは中国大陸あるいは朝鮮半島から留学生をたくさん迎え入れてまいりまして、国境や国籍を越えて広い世界的な視野に立って物を考え、国際的に活躍できる人間の形成をめざしてまいりました。

このたび、横浜に校地を広げました。それを機会にこの建学の精神あるいは伝統をこの新しい時代に生かすことを願ひまして国際学部設立を計画しました。それで今年、文部省にこの申請をいたしました。予定通り行きますと、1986年の4月にこの学部が発足いたします。そして国際人の育成ということできさらに本学は教育の成果を上げることになると思っています。

私ども大学の国際交流の一環といたしまして、長いこと続けてまいりましたアメリカにありますミシガン州のホープカレッジという大学がございます。この大学とも交流が今年ちょうど20周年を迎えましたので、それを記念いたしましてこの交流計画の産みの親でありますポール・フリード先生をお迎えいたしました。水曜日の朝でございました。先生は「ヨーロッパ史に見る戦争と平和」という題で学生の前で講義をして下さいまして、非常に感銘深い印象的なお話をうかがいました。

このフリード先生、それから御三方をお迎えして今日は「地球世界に生きる国際人の育成」という題でお話をうかがおうとしております。シンポジウムが終りまで充実したものになることを願っています。今日は本当にありがとうございました。



司会：

本学の国際関係を担当しております副学長の福田でございます。

私、いろいろな国を旅するたびに違う文化と出会い、一面ですばらしいと思う反面、一面で、もしその異文化の間に相互尊重を欠く時には大変恐しいことが起こることをしばしば考えさせられます。例えば南米を旅しておりまして、古いインカの文化やアステカの文化がスペインの文化によって蹂躪されてゆく、わざわざそこにある文化の中心であった神殿を徹底的に壊してその上にキャソリックのカシードラルを何百年かけて造っていくといったような事を目の当り見るわけです。そして、本当にそういうことにショックを受けた思いがございます。ところが最近フィリピンのある島で青年たちと話をしておりまして、これと同じ刃を私に、ということは日本に突き付けられた経験がございます。新しいアルミの精練所が日本から進出している、あるいは、化学工業が進出している。そしてそこで単に水が汚れるとか、田畑が壊されるとかということだけではありませんで、フィリピンの固有の文化自体が徹底的に急速に破壊されてゆく、それを日本のいわば経済的な侵略だと、あるいは日本による文化の破壊だと言われてやり返す言葉がないわけです。そうでありながら、みなさんご承知のとおりこれほど現在空間が小さくなり、時間がなくなり相互に接し合いながら、影響し合いながら、依存し合いながら生きていかなければならない小さな地球という一つの星、その中でなぜこんなにいつも軋轢が起こり、緊張が生じてゆくのだろうかと考えます。

さっき学長が御紹介下さった数日前のフリード先生の講義の中でも、第二次大戦中のアメリカの武器貸与に対する償還金を今後平和のために、知的な交流のために振り向けようと叫んだフルブライト計画の事が出てまいりました。今日はそれぞれがいろいろな意味で豊かな国際的な経験をお持ちの方々にお集まりいただいて、今後そういう本当の意味での世界人になっていくとはどういうことなんだ、自分自身のセルフアイデンティティをしっかりと持ちながら、しかもなお目を、思いを世界に開いていくとはどういうことなのだろう、そういう事をそれぞれのお立場からお話いただき、またみなさんにもそれに参加していただいて午後のひとときを過したいと思う

わけです。先ず最初に国立教育研究所長でいらっしゃいます木田宏先生からご発言をいただきます。

木田：

御紹介いただきましたこのパネリストの中では私は一番国際経験の少ない方だなあとthinkながら、今のお話をうかがっておりました。

海外の経験は、戦争中に鉄砲を持ちまして赤道の南までうろろろしていたというのが私の経験でございまして、軍隊に呼び込まれて日本の島を離れるまで日本を離れたことはございませんでした。帰ってきてからも勤めておりましたのが文部省でございまして、国内の仕事がもっぱら忙しくて外のことはあまり考える暇がなかったのでございます。しかし、戦争でちょうどフィリピンの攻防戦が始まりました頃、潜水艦と飛行機の集中攻撃を受けながらフィリピンを抜けてシンガポールまで行き、ジャワに上がり、という経験を通じて我々学生時代には何にも知らなかったこういう広い世界があるんだなあと、大変おどろいたわけです。そういうわけですから行く前考えていたことと違って、行ってみるとなかなかジャワだってシンガポールだって日本よりも堂々としたところがあり、大都会もありますし、電車も走っていると認識をすっかり新たにいたしました。そして終戦をシンガポールで迎えました時に、私はたまたまある方面軍の司令部にいましたのですが、電話交換手が「今度は鉄砲を持たずに来て下さいよ、さよなら。」と電話器の向うで言ってくれました。たいへん印象の深い言葉でございまして、こういういい世界があったらなんとかまた静かになったら来なきゃいけないと思っておったのですけれども、シンガポールへその後行きましたのは30数年のちのつい最近のこととございました。役所の後半から少しずつこの外の世界のことが聞えてまいりまして、いろいろ考えなければならぬことが起こりました。海外に日本人学校をたくさん造らなければならない、というようなこともだんだん起こってまいりました。鉄砲を持たずに日本人達がみんな世界中に歩くようになったなあとこの感じを強くしていたのでございます。

しかし、そうしたこの体験が広がっていくにつきましても、どうも物の考え方、意識の面でもっともっと考えなければならぬことがたくさんあるだろう、という感じがいたしました。



なぜまた戦後国際化が広がったか。これは人間社会の技術の発展のもたらしたものだと思うのでございます。飛行機ができ、テレビができ、衛星が飛び、あつという間に我々人間の行動力が時間的にも空間的にも簡単に国境を越えてしまう、こういう現実からいろいろな国際的な問題が活発になってきた。たくさんの方々がどんどん開発途上国へ出かけてゆき仕事をなさる、そういう局面が広がってきましたのは、すべて人間の活動力が大きくなった。今日はもっぱら国内の事を考えていればよかった文部行政でさえも地球上のあらゆるところに、日本人の学校をつくって日本人教育という問題を考えねばならない、そういうところからまた子供たちが日本へ帰ってくる、という現実を考えねばならない状態にまでなったのでございます。ふり返ってみますと、私も学生の頃からヨーロッパの文化のことはよく勉強しました。当時はアメリカの文化をパカにしておりまして、ああいうものは文化ではない、ということでアメリカがどうなってるかという勉強はしなかったのでございます。少なくとも私自身にはそういう意識はございませんで、やっぱりルネッサンスから始まるヨーロッパの文化はすばらしいものである、という勉強をいたしました。しかし、今日のように、日常の行動が地球規模にみんな広がってゆく、向こうからもこう入ってくるという時のその知的認識として我々が習ったような勉強でよいかということを考えますと、ちょっと具合が悪い点が出てきている。それは私どもが習った時の文化というのはどうしても静的な文化なんです。そしてまた、あまりにも文化的でありすぎまして、戦争にかされたフィリピンがどうなっているのやら、マレー半島がどうなっているのやら、インドシナがどうなっているのかということは、まるっきり知らなかったのです。そしてそれを知るということの知り方が、このお互いの相互関係で緊密なとり組みになってしまつて、何かが起これば、すぐ国境を越えて相手方にも影響するし、こちらへも跳ね返ってくるという緊密な関係、相互関係という問題をあんまり考えていなかった、というふうに思うのであります。日常の活動範囲が拡大すればするほど、そしてそれを日常の行動として行為しなければならなくなるほど、実は相互に相互依存の関係にある、というこの動的な実体というものを認識する必要がある、ということ

感じておるのでございます。

今日では、日本でどういう予算を組むか、日本の予算規模がどのくらいになるのか、ということはお隣の韓国から始まりましてアジアの国々はもとよりですけれども、ヨーロッパの国々でさえもそのことがそれぞれの国々の経済の発展にかかわり合いを持つ。かつてアメリカの経済が風邪をひくと日本の経済は肺炎を起こす、と言われたことがありました。そういう現象が今日本の経済と日本の周辺、それだけでなく、世界規模で起ころうとしております。また、どこかで異常気象が起こりますと、世界中で食べ物の流れ、食物の輸出、輸入の流れが変わってくる、という大きな変化が、物の流れ一つにつきましても19世紀から20世紀の前半までの地球社会における物の流れと今日の流れは違っておりますし、物だけでなく人の動きが全部違っております。

今日、そういう動いている現象について、私どもが知的な認識としてどれだけのものを持っているか、ということを考えますとたいへん寂しい感じがいたします。日本で外国の事について知ることは熱心ですけれども、アラビアについて、今日のイスラムについて知る人は非常に少ない。しかも、日本が取り引きをしている圧倒的な部分がこの地域にある、というような現実の物の動きと人の動きとそれに伴う意識の動きというものと大きなずれがある、というのが意識の面で考えられる、あるいは知的認識の面で考えられる大きなギャップであります。これが教育の上では、もっともっと真剣に考え直さなければならない課題だと思っております。

もう一つは、この知っているということについては確かによその事はよく知っているわけですがけれども、それでは国際的になったかと言われると、海外に行く機会が多くなった若い世代においても、はたして国際化が進んだと言えるかよくわからない、という行動の面での問題があります。最近、外交官も外国へ行きたがらない。日本の在勤の方がいいと言う、これは、意識から反映してきた行動の様式なのでございまして、日本がよくなったということの結果かもしれませんけれども。最近400万人以上の若い方々、日本人が海外に旅行に出かけたりいたしますけれども、それではたして日本人が国際的に行動し、理解できるようになったかというとなかなか疑問です。つい先月もジュネーブに行つて参りました。

国際会議に出てきたのですが、私の泊まりました中程度のホテルには毎日のようにジャルパックで多数の日本人旅行者がおしかけて参ります。そして全部集団で行動しておりまして、一人が店屋に入っておみやげを一つ買うとたくさんの人がみんな買うが、先頭の人が買わなかったらみんな買わないで出てしまうという現象を毎日毎日繰り返しているわけです。日本人は、歴史的な習性になったことかも知れませんが、外の事に非常に興味を持って、認識をして取り組んでくる、ということは2千年来の経験があります。そして持って参りまして、たいへん上手に自分で使いやすいものに直してきたという長い歴史があり、技術があり、そういう習性があります。しかし、今日のように、日本人の行動が広がって、至るところで世界中の人とつき合わなければならないという時にその意識と行動の中には、自分を紹介するということは、なかなかでてこない。自分を自己紹介して相手に知ってもらおうということは、まったく下手くそでありまして、人がどうしているかということだけはきよきよ見て来るわけではありますが、自分がこうであるという自己紹介をなかなかしないのであります。そこで異質な人達との間の付き合いということもまことに下手くそであります。日本人が海外で日本人だけで固まる、集団で行動するというのは、考えてみますと日本人だけのことではないかもしれません。アメリカ人についても多くそういうことが語られることがございます。しかし、ちょっと度がすぎるといえる点がですね、集団で固まっていなくて行動しない、そして付き合いをしない。本当の付き合いというのは、実は一人と一人との間で起こることです。国の使命を持って外交官として仕事をしておりまして、あるいは会社の社員として会社のために行動しておりまして、集団として行動のできることではございません。どうしても一人の個人が一人の個人との間で話をし、付き合い、それがうまくいった時に国の仕事になったり、会社の仕事になって効果が帰属するわけですが、行動自体は、一人の人間と一人の人間との行動である、ということを考えなければならない。そして、自分の狭い会社を離れ、自分の狭い村を離れ、自分の狭い国を離れて違った人々と行動するとき、付き合えるという気持ちで行為をする、その意識が足りないと思うのであります。

私は結局、これからの地球社会に生きる国際人というのは、逆に自己の確立をはかって誰とも対応できる、そのためにはどういふことが必要かと言いますと、自ら自分が何であるかということ自分で認識しなければいけない。人に対して私はこういう事でお役に立つことができると言いますという自己紹介ができなければいけません。人に対して何をしてあげることができるのかという事を説明できない一個の人間であれば、それは結局相手からは、付き合いってもらえない人間になる、そういう意味での、行動の面での意識って言いますか、これは実は考えてみますと、何も国際化の時代だから外国のことを知ろうという必要はないのでありまして、国内で考えてみてもそうなのです。同じ学生であるということで同窓会は熱心ですけれども隣の大学を卒業した人は全く無縁の人であるという顔をしています。また、付き合いが難しい。同じ専門の研究者の仲間では気軽に付き合う面がありまして、ちょっと専門が違くと全く無知であり無頓着であり何にも知らない、そして付き合いができない、という了見の狭さがあります。ですから国際という問題は、何も海を越えて遠くの人ということに限らないわけで、お隣の人もどどのようなタイプの人であってもお互いに協力して付き合える、ということがないといけません。私は自分でも南方の各地を戦争で歩きましたし、それから戦後ヨーロッパへも時々行ったりしまして、もう人間の行動力がこんなに大きくなったら、隣の人に向けて鉄砲をぶっぱなすということは事実上不可能になりつつあるな、ということを感じました。またアメリカとソ連というのは人口も地域も少し大きすぎるために危険だ、ということを感じます。あれだけ長い歴史の過程でドイツとフランスとお互いに戦争を繰り返しました。しかし、おそらくはこれから将来に向けて、ドイツとフランスの国境に両国が兵隊を配置するということは起こらないでしょう。日本の中でも考えてみれば徳川時代までは、お互い弓矢を持ち、鉄砲を持って殺し合っておりました。今日ではもはやそういう昔に返るということは誰も考えないでしょう。人間の行動様式が大きくなって付き合いが広くなりつつあるからであります。私はこの歴史の過程というものが、逆もどりして日本の国内でまた殿様が出てきてお互いに武器を使い合うということは起こらない。人間はそれほどバカではない、というふうに

思っています。それは人間が行動力を伸ばし、意識を伸ばしていったことの結果だと思いますけれど、必ずしも今日の世界の現状を見ますと、それがすべてあてはまるというわけにはいかないことがいっぱい起こっておりますが、基本は、一人の人間が、いろいろな立場の人と騙されないように付き合う、へびのような用心深い知恵を持って、そして素直な良心を持って、そういう気持ちでどんな人とでも付き合えるということになることがこれから一番大事なことだと考えています。

司会：

ありがとうございます。続いて縫田曄子先生をご紹介します。縫田先生は現在ジャーナリストとして活躍中で、市川房枝記念会のお仕事もボランティアとしてお働きになっておられます。また、NHKの解説員としても大変有名な方でもいらっしゃいますし、今一番活躍されている御婦人の一人で、少女期上海で何年もお過ごしになった経験をお持ちでいらっしゃいます。

縫田：

私は、長いことマスコミの世界で仕事をしてきておりますが、婦人問題を専門にしておりますので、今日のお話もその立場から申し上げることになると思います。ただその前に一言申し上げておきたいのは、今、木田先生のお話の中にもありましたが、それがまた今日のテーマでもあるかと思うのですが、国際社会で生きる人はどういう人であるべきかということで私はむずかしいことはわかりませんが、国によって国の大きさが違い、それから宗教も違い、文化、国情いろいろなものが違うわけですが、そういう違いをあまりわだかまりを感じないで人間として付き合うということ、今、それを最後に木田先生もおっしゃったと思うんですが、むずかしい言葉で言えば、人権、お互いの人権を認め合うこと、そして、尊敬し、思いやりを持って付き合うということが基本的な事ではないかと考えるわけです。

冒頭に福田先生からたいへんに御丁寧な御紹介をいただいて、ありがとうございます。その中で私が中国に育ったという話をして下さったのですが、私は中国の上海で生まれまして、小学校時代を上海と北京で過しております。それは、父がやはりジャーナリストでございまして中国を専門とした人間で今93才でございまして、その父がおりましたものですから中国にいたわけです。日



本へ帰りましてからも中国との関係で私のうちはいつも中国人の留学生が出入りしておりました。母は食べざかりの学生さんに、食糧事情の厳しい時にも一生懸命に食べるものを作って一月に一回留学生に家を開放していました。そういう中で育ちましたので、私はそのことはわりとあたりまえの事だと思っていたのです。ある時、学校に行きましたら友人が、私の家によく中国人の留学生が来るということを誰かから聞いたとみえて、「中国人が家に来るなんてうすきみ悪いじゃないの」（丁度日華事変に入っていた）と言われたんですね。私は本当にびっくりしました。そういうことが私の頭の中に非常に強烈に残っております。それから私は中等学校はミッションスクールでございまして、副校長とそれから、先生方にアメリカ人の先生が多くいらっしゃいました。その中で私が非常に尊敬する先生方もおられたのですが、私がその中等学校を出ましてから、日米戦争になったわけですけど、その時にまだ私は成人になっていなかったのですけど、アメリカ人の先生を非常に尊敬していたものですから、うっかり大人の前で「アメリカが戦争に負けたらこまる、日本も負けたらこまる、だからフィフティー・フィフティーで引きわけになるといい」といったものですから、お隣の人に大変叱られまして、「自分の国が半分しか勝たないなんてとんでもないことをこれから人の前で言っちゃいけないよ」と^{たしな}められました。で、その印象がまた大変強く残っているわけです。こんなこと申し上げますと今の若い方は、「なんだ、隣の国の人が来て気味が悪いとか、どこの国がどうだとか、ずいぶんおかしい事だ」とお感じになると思うんですが、今でこそこれだけ情報が多くなりまして、それから交流も盛んになりまして、まったくこんな事はおかしい事になってきたので、そういう意味では非常に進んで来たと思うんですが、一方で非常に進んでいない分野があると思うのです。いろいろな意識の中で少しも進歩していない部分で私が痛切に感じますのは、女性に対する考え方が日本では非常に遅れていて、もっと平たくいうと女性の人権の問題にかかわることだと思えます。そこで、いくつかの例を申し上げたいと思うのですが、どういう部分が遅れているかと申しますと今、国連が提唱しております「国連婦人の十年」にあたっておまして、その提起している基本的な問題は〔男性〕とか〔女性〕とか言う性別に

よってその人の生き方を決めてはいけないということなのです。性別、役割、分業意識の排除というふうに言っておりますけれども、性別によって役割を決めてはいけない、つまり男性だから社会で働くことはいい、女性だから家庭にいなければいけない。男性は社会で働くのだから家庭のことはまあ適当でいい、女性は社会のことについてはあまり口を出すものではなくその役割も果たす必要はないとか、性別によって役割や生き方を決めてはいけないということを世界的に提起しているのです。この問題は全世界に共通していることなのです。ところが日本はこれが非常に強いわけです。この考え方が、この意識がなかなかぬぐえないわけなんです。それがいろいろな国際的な社会、国際的な場になりました時に非常に日本にマイナスを与えるということ、これは意識ですから一朝一夕になおらないのです。知らず知らずのうちにそういう意識で物事を判断するということが出て来ます。いくつかの例を申し上げた方がいいと思うのですが、私が昨年秋に国連の地域の会議がございましてバンコックにまいりました時に、婦人問題の会議に出席されていたオーストラリアのエコノミストと親しくなりました、その方は以前国連の機関でエコノミストとしてお仕事をされた経験をお持ちで、その時の上司が日本の男性だったのだそうです。その時仕事が非常にやりやすかった。なぜかという、自分は専門の仕事なのでいろいろな会議でも発言をするし、その上司と意見が違えば反対の意見も当然する、ところが彼はそれを非常にいやがった、そして女のくせにということが無視されたり、時には感情的にいろいろされたこともあったという訳です。彼女はそれがその人の個性だと思ったんですね、ところがその上司が日本へ帰り、又別の日本人の男性が上司で来たのですが、自分に対する扱いがまったく同じだったというのです。それで彼女は同じ国連機関で働く他の女性達に聞いたところ、その人の評価がわりと共通していたらしいのです。彼女はそんなことを率直に私に言って下さったのですが、私、これはその男性が別に特にいじわるをするとか、そういうことではないと思うんです。日本の社会がそういうふうになっているので、いろいろな会議で女性が一緒に、同じ立場で発言するとか、あるいは上司に対しても反対意見を述べるとか、そういった習わしが無いものですから、とまどってそういう態度に

出たのだと思うのです。これはやはり日本人の意識の中には女性は普通は家庭のことをしていればいいので、社会的にそういういろいろと口出しすることはない、ということが根底にあって、それがこういう態度に出てくるのだと思うのです。もう一つ例を上げますと、これはアフリカの方で、行政の、わりにトップのクラスにいらっしゃるんですが、その方が日本は行政機構が非常に進んでいるということで視察にこられ、役所とか大学など見学されたのだそうです。そして、いろいろ行かれてるうちに、大学の教授は圧倒的に男性が多かったし、役所に行った時もいろいろな分野の説明を聞いたり、ブリーフィングを受けたりしたのだが、だいたい課長、部長と出て来る人はほとんどが男性で、まあそれはだいたい世界にかなり共通しますけれども、それでも教育とか福祉の分野ではわりに女性が責任のある立場にあることが世界的には多いのです。で、日本はこんなにいろんなことが進んでいる国の一つなのに、どうして男性ばかりなんだろう、ある日別の役所へ行った時もまた同じように男性ばかり、ここもそうかと思っていたところが、ノックをして女性が入って来た、「ここの役所は女性がいた！」とハッとと思ったら、お茶を持って来てそして出ていってしまった、で、それが非常に奇異に感じたということなのです。私、今ちょっと思い出しただけでもいくつか出てくるのです。最後にもう一つの例を上げておきます。昨年都庁が派遣した15人のスタディーグループのことです。東京都が情報公開の条例を作ろうとする目的で情報の自由、情報公開の法律が非常に進んでいるアメリカとカナダへ研究しに行こうというグループのメンバーに、女性が2人おりましてその中に私も加えさせていただいたわけです。男性の方はだいたい大学の教授や法律の専門家の方、行政の専門家の方でした。で、アメリカ・カナダへ行き役所や新聞社などいろいろな所を回ってきたのですが、行く先々の要所、要所で女性が責任のある地位にいて、そして我々にいろいろな説明をしてくれたり、質問にもてきばき答えてくれて、もうほとんどの所に女性が長やサブでおられ責任を持ってやっておられたわけです。

そのことについて私達のグループの男性の方たちは非常にショックを受けられたらしく、宿へ帰って夕食の時の話が法律で感心したことよりアメリカやカナダの女性

の仕事ぶりに感心したことだったのです。これは非常に意外に感じられたというのです。それほど日本の社会の中で女性に対して、基本的な人権として、その女性がどういう職業を選んでどういう生き方をするのか、家庭の責任を持ってかつ社会的な役割も果しているという女性もたくさんいるわけですが、そういう場合に、いやそれは日本の慣習に反するものだ、男は社会に女は家庭にいるということが社会を丸くおさめるということだという、こういう考え方が非常に根強く残っている。これは若い男性の中にもありますし、また女性の中にもある。したがって日本の女性の生き方を見えますと、結婚志向型が非常に強い。つまり、自分の人生の幸・不幸はどんな相手を旦那に選ぶかということによって決まってしまう。旦那さんの方も悪妻と良妻でずいぶん差が出てくると思うのですが、女性の場合でも圧倒的にその男性で一生が決まってしまうという生き方を選んでいるということです。先ほど司会者がセルフアイデンティティということをおっしゃいましたが、そういうことは一般に弱いのかもしれませんけれども、日本人や日本の社会が女性に対し非常に偏っているということをかかなり認識していないと、今国際社会に出て行った場合にいろいろな問題が必ず起こってくるということを私は痛切に感じるわけです。それが今日私が申し上げたかったことなのです。

司会：

ありがとうございました。どうも国際論の一つの盲点を突かれたような感じがいたしますね。それでは次に豊田利幸先生をご紹介します。豊田先生はこの4月から明治学院大学の専任としてご赴任下さいました。それまで名古屋大学に長くいらっしゃり、その前は立教大学でも教えていらっしゃいました。先生は原子物理学者として同時にそういった専門の立場を広く社会に開いて核時代の平和問題を論じられ、またその関係の御著書も多く、そういう意味で国際的な平和に対する展望をお持ちの学者でいらっしゃいます。

豊田：

私は物理学者なものですから、今までのおふた方のお話とは多少視点を変えて、この表題の「地球世界に生きる国際人の育成」という問題を考えてみたいと思います。

私は、人類は今歴史の大きな曲り角、あえていうなら

ば運命の岐路に立っている、と思います。それは申すまでもなくサイエンスとテクノロジーのかつてみなかった進歩によってもたらされたものであります。先ほど木田先生もご指摘になったこのサイエンスとテクノロジーの未曾有の進歩のことですが、考えてみますとサイエンスの進歩、あるいはテクノロジーの発達ということは、本来喜ぶべきことであるのに、どうしてこれが運命の岐路、英語でfateful junctureという不吉な感じを持つ、こういう実態をもたらしたといわなければならないのでしょうか。そこで、この問題について私がしてきた物理学の方法という点から考えてみたいと思います。

私は、これは根本的にはサイエンスとテクノロジーの構造と、教育の問題であると思いますが、ここではサイエンス一般ということではなく、私が専門にしております物理学を俎の上に乗せて、この近代の科学の持つ大きな特長、それは長所であったと同時に非常な弊害を今もたらそうとしている点をご説明したいと思います。

物理学というのは、多種多様な自然現象を、できるだけ少ない法則を媒介にして、統一のあるいは包括的に理解しようとする学問です。この規定は今日も正しいと思いますが、問題はアプローチの仕方にあります。ご承知のように、ガリレオに始まる近代科学あるいは近代物理学の方法は、徹底的な分析と単純化であります。

人体解剖に端を発する分析的処法は、事物と現象を可能な限り細分化して、その中に共通性を見出そうというものであります。ここでいう細分化とは、単に空間的なものだけではなくて時間の細分化をも意味します。これは他の分野についてもあてはまると思いますが、一番わかり易い物理学の例で申しますと、我々の周辺で起っている多種多様な物体の運動がありますが、これは今日ニュートンの運動方程式とよばれる微分方程式のかたちで、その本質が明らかにされています。微分という言葉からおわかりのように、きわめて極限された空間、きわめて短時間における運動の性質によって、運動全体を把握することができるのであります。言い換えますと、時間的、空間的にローカルな性質こそが事物の本質であるという考え方であります。

このような考え方にもとづく研究方法は、つい最近までめざましい成功をおさめてまいりました。私達が極微の世界とよばれている非常に小さな世界、長さでいいま



すと 10^{-13} cm以下とか、時間も 10^{-8} 秒以下というような局所的な時空にまで私達の認識が届くようになっております。

しかし、反面、対象の細分化が進み、物理学それ自身でさえも、驚く程多くの専門分野にわかれてしまいました。それは自然科学の他の部門だけでなく、学問全体についても見られ、実におびただしいdisciplinesがつくられてしまいました。これに伴って専門家養成の必要から高等教育、とくに大学教育の主要部分が、いわゆる専門課程に移って、かつてのartés liberalés、日本語で一般教育と訳されていますけれど、本来は自由人の学芸であります。それは低級なものだとおとしまられる風潮さえ生じてきました。この自由人liberiのための学芸よりも、nation stateに対する何らかの意味でのservantを養成することに教育の重点が移ってきました。で、戦後、通信・運搬の手段は長足の進歩をとげ、私達が住むおそらく唯一の空間である地球の大気圏内空間はかつてない狭い空間になりました。ところが、この局所的なアプローチというのは、空間は無限であるということを実感的に受入れていたわけです。ところが、そういう考え方はもはや有効性を失ってきているといっても過言ではないと思います。特にこれがはっきり出てきているのはテクノロジーの部門で、ある局所的な空間で非常に有効でありうるテクノロジーが地球全体とした場合に、有効どころか有害にさえなっています。学問全般につきましても、これまでのdisciplinesだけではどうにもならないことを学者自身気がついてきているのです。

そのために、interdisciplinaryあるいはドイツ語のGrenze Gebietの分野の学問が必要だと誰もが言うようになってきています。

Dr. ポール・フリードは歴史学の専門家と伺っておりますので、皆さんは意外にお思いかもしれませんが、最近の物理学の傾向として、歴史学との結びつきが見られることをこの機会に御紹介したいと思います。少し前まで物理学という学問は、再起可能な現象を扱う学問で、それゆえにこの再起が不可能な事象を対象にする歴史学とは根本的に立場が異なるとされています。しかし、良く考えてみますと、再起可能といっても、どの時間の範囲で起こるかということが問題です。これまで私達は無意識に人間の寿命を基準にして考えてまいりました。つ

まり、一人の人間が活着ている間には起こらない、起こってもせいぜい一回だというように現象を区別していたわけです。ところが近年めざましく進歩しました astrophysics あるいは molecular evolution という学問、これは分子進化の学問であります、一人の人間が活着ている時間の何万倍、いや何億倍の長い時間に1回か2回起こる現象を扱っているわけです。現に Between Physics and History という非常に優れた論文も出ております。

この様な次第でありますので、私はこのシンポジウムの主題にありますグローバルの意味を単に空間的な概念にとどめず、時間的に大域的にとらえることも含めたいと思ひます。言い換えますと、人類の生存に関係のある時空全体を視野に入れた研究・教育が必要となつたのであります。このように申しますと、一昔前でしたならば、私の言うことがいかにも現実から遊離した予言者ぶつた大言壮語と冷笑されたのでありましょう。しかし、現在では「地球の運命」と題する本が世界的なベストセラーになっていることからわかりますように、人類は今文字通り破滅の淵に立っていると思ひます。実はこれが reality であつて、恐るべき量の核兵器による抑止力で平和が保たれている、と思ひるのは実は幻想であります。この二つの間にある驚くべき perception gap を realize することが今日の教育にとって、焦眉の急の課題であると私は考へます。私が最初に、我々はこの運命の岐路に立っていると申したのは、この理由からであります。

学問の発展のために、個々の discipline の、そしてさらに各専門分野のより一層の深化が必要であることは申すまでもございませぬ。しかし、その大前提として、個々の研究者がまず人間であること、これは私が最も尊敬する物理学者である N. Bohr の格言で、テレンチウスの有名な言葉「余は人間なり、されば人間に関することの一つとして余に無縁なりとは思はず」であります。物理学者は先ず人間であらねばならない。というのが原子物理学を切り開いた N. Bohr の言葉であります。さらに、Einstein や Russell、湯川秀樹先生が一緒に出された 1955 年の manifesto の冒頭の言葉で“members of the species Man”「我々はヒトという種の一員」の自覚が必要であると思ひるのであります。これを若い世代が自覚するようにすることが教育の重要な任務の一つであらう

し、これはglobal citizenといいかえても良いと思います。

目下、明治学院大学が設立の準備を進めております「国際学部」は、まさにGlobal Education for Global Citizensを構想していると言っていいと思います。それは当然言語、思考方法等国際化を進めることを通じ、transnationalなconfidence building、相互の信頼の確立を目指さなければならない。ですから、新しい教育は知識、あるいは情報の集積、整理といったことではないと思います。こういうことはコンピュータによって近い将来殆んど機械に委ねることができるようになるでありませんし、肉体的労働や事務処理も大幅に機械化されるに違いありません。

したがって今日、全ての学問あるいはdisciplineは平和を指向しなければならないと思います。人類が破滅した後、いかなる学問も芸術も、その存立の意味を持たないことは明白だからであります。

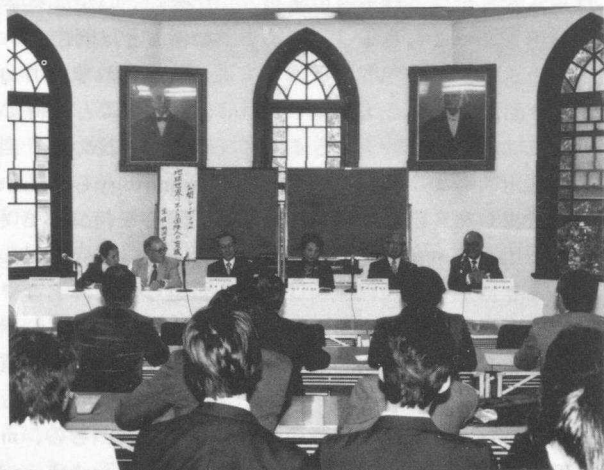
私がこれまでかかわってきました自然科学については、このことは特に重要な意味を持っているように思われます。長い間、自然科学はvalue freeの学問とされ、technologyもtechnical feasibility、技術的な可能性のみに関心を持つべきものと考えられてきました。そしてscienceもtechnologyも両刃の剣であって、その善用も悪用も自然科学者や技術者の関知するところではない、ともいわれてまいりました。その結果何が起ったか、アイゼンハワー大統領が1961年の告別演説で言われたように、大統領の力をもってしても押えられなかったと嘆かせた二つのもの、military-industrial complexとmilitary R&D(Research and Development)のエリートのpressure groupが生まれました。

これが現在、冒頭に述べましたfateful junctureをもたらしている、少なくとも非常に大きなfactorの一つであると思います。

今日では、自然科学といえども、平和という価値からfreeであることは許されず、またこの価値体系にはいろいろなものがあるにしても、最小限、technologyは戦争をはじめ、人間の環境破綻に加担してはならないという倫理的なcodeの確立が必要であると思います。

私達は今、疑いもなく人類の歴史の重要な局面に立つ

ていて、これを克服するには直接的には政治を動かすことですが、大学に籍を置く者としては、次代を担う若い世代の教育、そして全ての人が生きるに値する世界、livable worldの創造に向けることが最大の責務であると考えます。そのためには教育体制と教育内容を新しい理念のもとで再編成し充実させる必要があります。もちろん、これは、いうは易く、行うは難い大事業であります。しかし、hopelessnessは何もしないことに通じ、私達は力を合わせ、希望を持って大事業にとり組みたいと思います。そして、新しくつくられる「国際学部」が、私達に、少なくとも私にとって新しい一歩であることを願っております。最後にHope Collegeのフリード先生への思いをこめて英語でone sentenceを言わせていただきます。I would like to anchor my hope in the coming faculty. Thank you very much.



司会：

ありがとうございました。新しい宇宙的な展望を開いていただいたように思います。

それでは最後になりましたが、Dr. Paul FRIEDをご紹介します。フリード先生はオーストリアはウィーンの出身でございます。御父君はオーストリアの著名なジャーナリストでいらっしゃいました。それから御母堂は、女性解放の立場から世界的な産児制限の運動を起こされたサンガー夫人の盟友として同じように運動に挺身された女医さんでいらっしゃいました。また御親戚にもノーベル平和賞を受けられたアルフレッド・フリードさ

んなんかもいらっしゃるわけですね、そういう背景をお持ちなものですから、ナチス時代になって一番先に御両親が収容所に送られ、そこで亡くなってしまいました。また御自身も、二人いたお兄さんも労働キャンプに送られてしまいまして、二人のお兄さんはそこで亡くなっています。そのような青年時代を送られたフリード先生の運命を変えたのはスウェーデンのプロテスタント・ミッションとの出会いだったのです。それを手伝われているうちにアメリカやイギリスのミッションナリーとも知り合いになり、一旦捕えられてからチェコスロバキアに逃がれ、イギリスを経てアメリカへ渡ったのは19才の時でした。それからホープカレッジで歴史を勉強され、ハーバードで帝国主義を研究されてマスターを取られたわけです。そういう経験を通して、平和の大事さと、特に青年時代における国際的な交流の必要をお感じになり、ホープの歴史学教授として招かれて以来、ホープだけでなく全米の国際交流プログラムのアドヴァイザー等いろいろな形で青年の国際交流プログラムをinitiateしていただきました。そういう背景から今日は、先生の今後の世界および国際人の育成に対する展望をお話しいただけると思います。

P. FRIED :

まず第一に私は、英語で話さねばならないことをお詫びしなければなりません。

日本人がアメリカを訪問する際、当然のように英語を勉強してくるのと比較して、大変はずかしいことだと痛感しております。というのも、私は先週日本にまいりましたが、どこでも英語で用が足り、まったく不便を感じない毎日で、アメリカではこうはいくまいと思っております。

次に私は、森井学長、福田副学長、そして旧友のVan Wyk教授をはじめ明治学院大学の皆様から大変心のこもったおもてなしを受けたことを感謝します。個々の好意のみならず皆様のグローバルな教育、グローバルな認識に対する考え方、例えばこのシンポジウムのテーマに「Global Education for Global Citizens」が選ばれたことを特に喜びたいと思います。そしてこの表題をどんな方法でより早く実現し成功させるのかが私をはじめ皆様の課題でもあるわけです。私の前にスピーチされた豊田先生の言葉の中に大変すばらしいポイントがありま



したが、それも含めてお話ししたいと思います。

今まで諸先生方のお話を聞かせていただき、強く感じることがございます。多分この50年、少なくとも最近20年は私が呼んでいるところの「国際教育」がどこの国においても必要とされてきました。そのようなこともあり、数ヶ月前私に名誉国際教育部長の称号が与えられたことは大変嬉しい出来事であったわけです。しかし、今日いろいろな方のお話を聞いておりまして、「国際」という言葉乗り越える必要があることを痛感しました。「国際」は個人の主体性より特定の国やグループのことを強調した言葉だからです。ここで、一般的なものからひとつの例をあげてみますと、私達がグローバル、あるいは国際的プログラムの進展のためになにかを企図するとき、その過程の中で物理学者や科学者の研究分野と実にさまざまな共通点を見出すことができます。多分20～30年前から始まった宇宙へのプログラムと私達のこうしたプログラムは、その歴史からいうとそう遠く離れたところにはいないのではないのでしょうか。

国際的、あるいはグローバルな意識を養うためのプログラム開発を知的レベルで考える前に、いくつかの疑問に答えておく必要があります。まず我々は、いったいどこに行こうとしているのでしょうか。月に行くのか、それとも他の惑星をめざすのでしょうか。言いかえれば交流は東南アジアとするのかそれともヨーロッパとするのか、一国だけではなく複数国なのかという事や、先進国となるのか、発展途上国となるのかということです。第二は、そこには誰が参加するのか、誰を対象とするのか。誰と一緒に行くのかという質問です。私達は今まで学生や教授、スタッフとだけ関わりをもってきました。しかし今後はそれに社会人、婦人、高校生、子供達、そして最近言われはじめた熟年、高齢者まで対象として考えていかなければなりません。次の設問は大変重要なことですが、どの位の期間なのかということです。宇宙に例えたら、人々をいったい何日間連れていくのか、1日かそれとも数日か、と同様に数週間のプログラムなのか、それとも3ヶ月、6ヶ月、1年なのかといった期間の問題です。私達はこれらの疑問のいくつかを解決したとしても更に困難な問題に直面するでしょう。グローバルなプログラムに参加しようとする人達に、前もって何を、どのようにして教育するか、ということもあります。宇宙をめざす科

学者達は、ただ単に宇宙飛行士を「君、行きたまえ」と指名し、カプセルに乗せ、送り出したりはしないのですから。

ここで私の宇宙との比較は困難になっていくのですが、目的地にたどり着いた後いったい彼らはどうするのかということです。宇宙飛行士達が目標をもち、真空の中で生きる技術を与えられて任務を遂行してくるのと違うのです。彼らは先生に連れていってもらい、グループで行動し、その国へ入るのにあたっていくつかの焦点を定めます。訪問国で家庭にまで入りこむのか、文化に溶けこもうとするのか、あるいはただの観光客として残るのか。その準備教育は私達教育者にとって大変重要なことです。

このことに関してアメリカ人の学生と日本の学生を比較してはざかしく思いますが、例えば、明治学院大学から派遣されてくる学生は、ホープ・カレッジに着くと同時に英語の講義に取り組み、ホームステイではアメリカの家庭生活にすぐ適応できるように準備してきています。一方アメリカ人の学生は日本にしろ、ヨーロッパに行くにしろ、ほとんど言葉は知らないし、訪れた国の文化や歴史もほとんど知りません。

このことについて私は悲観的にはなりたくないのです。その体験を通して彼ら自身に国際的、グローバルな感覚を養わせたいと願い、よかれと思われる教育を与えようとしているからです。しかし、それでも訪問している時はともかく、帰国する旅行者は、みやげ品とか美しい写真、おみやげ話をもって帰ってきますが、帰ると同時にまたもとの学校生活にもどってしまい、彼らの考え方を変えるきっかけになったかも知れないこの経験を別の場所にしまいこんで卒業とか進路とは別なものとしてみることが多いのです。日本と違いアメリカでは、自分の経験を他の人や、後々に伝えていくといったことは考えないのです。

ここで私は、いま気になっている二つの事について話してみたいと思います。まず、国際的な教育にたずさわる関係者は競争関係にあり、協力しないということです。これはもちろん明治学院大学とホープ・カレッジの間のことではなく、ごく一般的なこととして聞いていただきたいのですが、ひとつの例として、私が過去にウィーンで開催されたアメリカ人学生のためのプログラムに参加し

た際の出来事ですが、1956年に私達が参加し、2年後にA大学、翌年B大学と拡大していったわけです。そのプログラムには、参加した我々もまた独自のプログラムを作成して提出したのですが、年が変わり参加大学も変わったにもかかわらず毎年同じプログラムで行なわれ、折角用意していった我々のプログラムは何も採用されなかった、という事がありました。

2番目として 一方的なプログラムであってはならないということです。これもまたウィーンに行ったときですが、あまり適切な事例ではありませんが、連れていった学生は普段からあまりオーストリアの学生と接触することはありませんでした。そして学生達はオーストリアの家庭にホームステイしておりましたが、そのホームステイでさえ枠にはまったプログラムの中に組み込まれたもので、連れていった学生達は滞在中ずっとオーストリアのシステムの外にいたわけです。

私はこれらのことをすべて否定的に言おうとは思っていません。私達が現在まで実施してきた分野から更に進めるために、より良い、より幅広いプログラムの検討が必要となっているからです。今後は、交流する大学間での協力、受ける側と送る側相方の密接な協力が更に必要となってくるでしょう。

最後に交流20周年を迎えた明治学院大学にもう一度お祝いの言葉を申しあげて私の話しを終わります。

司会：

ありがとうございました。司会者として今までの4人の先生方のお話をごく短くまとめまして、もしそこに皆さんの方から特にお尋ねしたいことがありましたらお受けするといった形にしたいと思います。先ず木田先生は、意識の面で戦前と戦後を比較しながら、静的な文化理解、staticからdynamic力動的な文化理解の必要を説いてくださったわけです。そして、そういう知的認識の欠如だけではなくて、さらにそういう知的認識のレベルと行動レベルとのギャップ、さらにその背後にある我々のいわば主体性の欠落、こういったことをご指摘いただきながら、国際化への要諦というのは、はっきりとした自己同一性、主体性を持った個人がいろいろな差異を越えて隣人と交わりを持てる人格と行動を養うことにあるのだという御示唆をいただきました。

縫田先生からは、御自分の個人的なご体験も踏まえて、

日本の非国際化の背後に実は私どもの社会にある婦人に対する、あるいはもっと言えば性別による人権意識の後進性、欠落の問題が、つまずきになっているのではないだろうかというご指摘があったわけです。

豊田先生は最近の物理学の非常にマイクロなものまで、またマクロな大気圏外にまで知識が及びながらしかもそれが細分化され、本当の意味での大事なりベラルアートの尊重が消えていく状態を憂えながら、改めて学際的なオリエンテーションの必要、それと私どもが今、人類という種の一人であることとその人類が直面している破滅の淵にある現実と、これを越えてもう一度希望の持てる、それから我々一人一人が生きるに値する世界を再構築するための方法を御示唆いただいたわけです。

またフリード先生からは、全体の考え方をスペースプログラムのモデルにたとえて、我々はいったいどこへ行こうとしているのか、誰を送るのか、どれだけの期間そこへ送ろうとするのか、いったいそのために何が準備として必要なのか、いったい行って何をしようとするのか、帰ってきてそれをどう我々の展望と変化への糧とするのか、そういうことを考えながら、現実にはいろいろなところで行なわれている国際プログラムが実は依然として非常に独善的であったり、同じようなことをやりながら、お互いが相手を競争視したり、一方的であったり、開かれていなかったり、そういった現在、我々が持っている国際プログラムへの狭さと反省をご指摘いただいたわけです。

それではご質問などございましたらどうぞ。

問：

木田先生にご質問いたします。特に戦後の教育の中で成人・青年の社会性開発の教育が大変遅れていたのではないのでしょうか。一方国際化というものは企業が先行し、世界でおそらく最も進んだ企業内教育の手法を手に入れて、学校教育よりむしろ企業の社会性開発の教育が進んでおったのではないかと。そして、そこに一つの歪みがあったのではないかと。企業という視点からのみとらえた一つの教育であったのではないかと。そこで、今後どのように公的あるいは民間教育機関で社会性開発の教育を考えていくのか、というのが一点。また、いわゆる日本人の島国からくる特性といいますか何でも自分(日本人)の手になじませることが大変上手であること、たとえばお茶碗

からラックスの石鹼まで日本サイズにしてしまう、非常に巧みになじませる。これの一つの功罪、日本化がうまくできたということによって産業開発されてきた。いろいろな面で開発が進みましたけれど、逆にその罪の方は、相手の人間も日本化したい、前に立つ外国人を日本人の目で見たい、日本語で話してほしい、日本を理解してほしい、という自分中心で相手までハンドルしたいとするジャパナイゼーションの一つの過ちとも言えますか、これが島国根性からくるのではないか、これもやはり国際化教育の大きなネックになっているのではないかと思うんです。

司会：

木田先生いかがでしょうか。

木田：

最初の質問にありました企業の社員教育というのは、企業によっていろいろだと思いますが、私が伺った2、3の例から見ますと、いかに現地の社会に社員が生活者として適応するかということにかなり気を配っています。これはまた実際現地に社員が出て行かなければ出来ないことございまして、結局企業は、派遣したスタッフを東京にだけ向けておるという意識があるわけですが、それでも、それでは本当の企業としての地域教育もできないから、企業の東京から行った人間が、現地の社会に家族を連れて行って生活ごと入るように、という方向をとっているようでございます。その点ではかなり体験としてやらなければならないことをしている感じがします。むしろ学校の中でこの教育を「国際」という言葉だけにとらわれますと、どうしても遠いし、非現実的なことになる、私はもちろん知識として諸外国のことを知ることは大事だと思います、しかしそれが相互にかみ合った相互依存のシステムであるので、日本の国内で起った事もすぐ国際になり、国際関係で起ったことも国内政治の問題にもなる事があります。そこで、国境というもので仕事違ってはこないという実態を知識としては教えなければなりませんけれども、行動としては、日本の社会にある内と外の行動様式をどうやって変えていくか、これを日頃の実践の場で考えますと、もう少し皆さんと「おはようございます」という挨拶を交わす実践をすすめるべきではないかと考えています。隣の人と会っても黙っていて「おはよう」とも言わない、という生活の行動様式を

改める必要があります。日常での隣人とのつき合いということについても、もっともっと考えなければならない。田舎に居るときはコミュニティーで良かったかも知れませんが、東京へ出てきてコミュニティーの維持すらできない、これが一番基本的な問題なんで、その意味で国際化というのは、実は国内における現実の課題であると思っています。それからジャパナイゼーション、これはおっしゃる通りですね、日本的に翻訳して理解する、ということだけやってきました。むしろこちらのことを相手にわからせようとするにはどうしたらいいか、ということが全然足りません。で、その一番足りないで困っているのは日本語教育です。外国の人に日本語を教える手法を全く考えていない。また、それを考えてみますと、日本人に対して日本語を教えるという手法すらどうもでき上がっていないのではないかという気もいたします。ですから、海外から帰って来た子供たちに日本語をどう教えるかというのは、ただジャパナイゼーションをして慣れろ、慣れろと言っている。これでは困るんですね、ですから自分を相手に紹介する手法、こちらの文化も含め、言葉も含めてこの方法論をもう少し作っていかないと、こっちが相手を理解したつもりであっても相手には理解されていない、という状態が長く続くのではないのでしょうか。特にそれは、最近家庭の中で考えても会社で考えても、世代間にそのギャップが大きいですね。ですから国際的ギャップを言う前に、その足元でそういう問題をもう少し考えなければいけないというふうに思っています。

司会：

ありがとうございます。それではもうお一人いらっしゃいましたらどうぞ。

問：

フリード先生に質問させていただきたいと思います。最後に先生がおっしゃった「国際」の言葉でInternationalとGlobalの違いをお聞きしたいのですが。と申しますのは、私達は「国際」と「地球世界」という言葉を非常にごちゃませにして使っていると思うんです。「国際」というのはあくまでも字を読めばわかるように国家が基本になっている、で、私はそれは日本語の言語体系ないしは文化体系に縛られているからではないかと思うのですが、今後我々は国家の中の日本人「国際人」とし

てアプローチすべきなのか、また先ほど豊田先生のお話にあった国家を越えた種の一員としての「世界人」で生きて行くべきなのか、今後21世紀に向けて先生のお考えを伺えればと思います。

フリード：

国際といいますと、それは非常に個別的に強調するようなもので、例えば日本人がどこかに働きに行けば何をするとか、アメリカ人が働きに行けば何をするかというものにポイントを置きますけれど、それよりも私は宇宙の中の地球を代表しているものとして、あるいは宇宙にいる人間たちとして生きて行くべきだと思っています。

司会：

さあ、実際の問題というと大変難しいと思うんですね、そういう突然に我々がglobal citizenに自分のnation-stateのidentityを越えて一挙になり得るのか、あるいはそういう理想に向かって私どもが、我々の日常性の中で、我々の行動圏の中で、我々のlocalityの中で何をすれば到達できるのか、そのへんを皆さんとお話しができればもっと深まるのではないかと思います、残念ながら時間が来てしまいましたのでシンポジウムを終了させていただきます。

最後に遠方からいらしたフリード先生、またお忙しいところをこのシンポジウムのために時間をお作りくださいました木田先生、縫田先生、豊田先生、それから始めから終りまで通訳をしていただきましたリバー先生に、もう一度改めてお礼を申しあげ、拍手をもって解散したいと思います。(一同盛大な拍手)

明治学院の国際性と その将来展望

国際交流担当副学長 福田垂穂

島崎藤村の自伝的小説「桜の実の熟する時」には、品川の方から坂を上ってきた主人公の眼前に展ける美しい学院のキャンパスと西歐の情景が活写されている。また藤村作詩の校歌ができる以前には、学生たちは宣教師教員の口ずさむ、それぞれの出身校、例えばプリンストンやラトガースのカレッジソングのメロディーに、日本語の歌詞をつけて歌っていたものだった。

その頃の学生は、英語で講義を聞き、英語の演説を競い、アジア太平洋学生会議などにも進んで参加し、活躍したものだった。エドウィン・ライシャワー教授も、東洋学者となった自分の原点として少年の日の白金の丘の、知的、開明的、国際的な雰囲気になつかしんでいらっしやる。

こうしてみると、本学の国際性はいわば開校以来のことであり、決して20年前に始まったものではないのである。しかし、ホープカレッジとの短期留学は、1964年当時は確かにひとつの交流モデルであり、事実多くの大学の注目も浴びたし、共同参加した大学も2、3に止まらなかった。

勿論、全般に国際化社会が進み、大学間の国際交流も進む中で、本学がこのプログラムだけに安んじていて良い筈はない。事実本学は、その後1979年にはアジアキリスト教大学連盟（ACUCA）に、I.C.U.、上智に続き、関西学院と共に加盟して、人的、研究的交流の可能性を、一挙にアジア全域に拡げた。また1983年には、本学の創設にかかわったと同じ長老派の韓国最古の大学崇田大学校とも姉妹校の協定を結んだ。

更に、来年に予定されている国際学部が発足を機に、こうした大学や研究機関との交流関係は、大洋州からラテンアメリカそしてアフリカにまで拡がってゆくであろう。

わが国で国際交流と言えば、従来とかく日本と欧米との間に偏り勝ちであったが、本学のそれは、特に言うところのアジア太平洋時代に相応しい量と質をもって展開することになる。

横浜キャンパスが、別して国際学部が、多くの国籍の教員や、留学生、帰国子女も迎えて、昔日の白金を越える、国際的生活共同体となる日を、皆さんと共に期待したい。

明治学院大学 Hope College
交流20周年記念誌

1985年3月31日発行

発行者 明治学院大学学長室



MELJI GAKUIN UNIVERSITY

明治学院大学

〒108 東京都港区白金台1-2-37 ☎03-448-5186 (学長室直通)